

第2章 教育の思想と歴史

中山 幸夫 敬愛大学経営学部教授

本章では、わが国の教育のあり方に確かな影響を及ぼした欧米の教育思想と、わが国における公教育としての近代学校制度導入以降の教育の歴史を概観することで、教育について視野を広げ、教育をより深く考える一助としたい。

① 「子どもの発見」と新教育の思想

1. ルソーからペスタロッчиへ

教育の思想は、教育について考えられたことを体系化したものである。それは人間(子ども)をどうとらえるかという人間観(子ども観)によって基礎づけられている。ヨーロッパではルネサンス(Renaissance)によって人間生活における旧いモデルが否定され、新しい生き方のモデルを探求しようとする時代の機運が高まりを見せた。このような歴史の流れのなかで、人間の本性を押さえつけず、人間の本性に従った教育のあり方を説く新しい人間観(子ども観)が誕生することになった。その代表といえるのが、放浪の思想家ともいわれたルソー(J.J. Rousseau, 1712-1778)の教育思想である。

ルソーはスイスのジュネーブに時計職人の子として生まれた。生後間もなく母親が死去し、そのため父と叔母に育てられた。若くして出奔し長く放浪生活を送ったが、ヴァランヌ夫人との出会いにより、学問と教養を身につけることができた。その後、パリの思想界にデビューし、アカデミーの懸賞論文に応募した『学問芸術論』(1750)の入選によって名声を得るようになった。

『人間不平等起源論』(1755)において、ルソーは当時の社会や政治に批判的

眼差しを向けた。『社会契約論』(1762)の冒頭では「人間は生まれながらにして自由である。しかし、今やいたるところで鎖につながれている」と痛烈な批評を投げかけた。そして、教育思想の傑作といわれる『エミール』(1762)において「万物をつくる者の手をはなれるときすべては善いものであるが、人間の手にうつるとすべてが悪くなる」と述べ、「合自然」の立場から教育のあり方を提言したのである。ルソーは子どもを単なる未完成の大人とみるのではなく、子どもには大人の原理に置き換えられない固有の活動があること、また子どもには自ら成長発達しようとする内在的な能力が備わっていることを説いた。それはルソーの革新的思想としての子ども観の表明(「子どもの発見」)でもあった。

ルソーは、子どもの内なる自然に従って教育を行うべきことを主張した。このような自然性を賛美する思想は時の為政者や教会から異端視され、ルソー自身も迫害を受けたが、その思想的影響は当時のヨーロッパ社会のみならず後の教育にも多大なインパクトを残すこととなった。

「民衆教育の父」ともいわれるペスタロッчи(J.H. Pestalozzi, 1746-1827)はスイスのチューリッヒに生まれ、ルソーの教育思想に啓発されながら自らの実践を通して子どもについて観察を積み重ね、そこから教育についての深い洞察を得た人物である。

ペスタロッчиは、ノイホーフでの農場経営を皮切りにシュタットにおける孤児院の設立、さらにブルクドルフやミュンヘンブーフゼー、イヴェルドンにおける新たな民衆学校の設立により、貧しい民衆を救済するための拠り所を教育に求めた。その教育思想の根底には、貧民の悲惨な生活状態を改善し、その子どもたちを貧困から救い出そうとするヒューマニズムの精神が流れている。そして、何よりもペスタロッчи自身が自ら教育愛を実践した「教育の聖人」(教皇)であった。彼がめざした理想の教育は、知・徳・体の全面的かつ調和的な発達を促す全人格的な教育であった。この考え方は「全人教育」という言葉とともに、わが国の学校教育にも大きな影響を及ぼす教育理念となっている。ペスタロッчиの教育思想は、『隠者の夕暮』『シュタットだより』などを通じて概要を知ることができる。

2. フレーベルと幼稚園教育の誕生

世界初の幼稚園(Kindergarten)の設立者として知られるフレーベル(F. Fröbel, 1782-1852)は、ドイツのオーベルヴァイスバッハに敬虔派の牧師の子として生まれた。生後9ヶ月で母親が死去し、父親が再婚して迎えた新しい母(繼母)とうまくいかず、孤独な幼少年期を過ごした。10歳のとき聖職者の伯父(実母の兄)に引き取られ、初めて温かな家庭生活を経験し、宗教的情操を育むことができた。堅信礼までの4年間、伯父はフレーベルを手厚く養育してくれたのである。14歳からは経済的事情により林務官のもとに弟子入りして森林で働き、自然界の営みから多くのことを学んだ。

その後、フレーベルはイエナ大学に進学したが、学費が続かず1年余で退学し、山林局の書記や測量師の助手などさまざまな職についた。やがて、友人の紹介により師範学校の校長でペスタロッチ学徒のグルナーーと出会い、彼の強い勧めで教育者の道を歩むことになった。そして、ペスタロッチのイヴェルドンの学校を訪ねて約2年間滞在し、人間教育の真髄を学んだのである。

ペスタロッチに師事しながら、フレーベルは幼児教育の重要性に注目するようになる。また、ゲッティンゲン大学やベルリン大学で鉱物学、地球構造学、結晶学などの学問を広く学びながら思索を深めた。1816年にはグリースハイムにおいて「一般ドイツ教育所」を開設し、翌年には学園をカイルハウに移し独自の教育実践を展開した。1826年には教育に対する自らの考え方を表明するために『人間の教育』を出版した。ここには彼の宗教的世界觀に基づいた教育の根本思想が述べられている。フレーベルはこの世のあらゆるものは神のうちに存在し、教育とは人間に内在する「神性」を引き出すことであると考えた。

フレーベルは1835年にスイスのブルグドルフの孤児院長に就任し、幼児の教育に当たることになる。1837年にはドイツに戻り、ブランケンブルグに教育所を創設し、幼児の遊び道具として「恩物」を考案・制作した。1840年には世界で初めての幼稚園となる「一般ドイツ幼稚園」を設立し、幼児期の教育と家庭生活、母親の自覚の重要性を訴えた。フレーベルの幼稚園は彼の教育思想と理論の実践の場であり、その後、世界中で普及して今日に至っている。

3. モンテッソーリと「子どもの家」

「幼児教育の母」ともいわれるモンテッソーリ(M. Montessori, 1870-1952)はイタリアのアンコナで生まれた。彼女はローマ大学の医学部に入学を許され、イタリアで最初の女性医学博士となった人物である。

医学部卒業後、モンテッソーリはローマ大学附属病院の医療スタッフとして働き、やがて発達遅滞児に关心を寄せるようになった。そして、彼らの観察を通して、発達遅滞の治療は医学的方法から教育学的方法に切り替えるべき問題としてとらえ、フランスの医師イタール(J.M.G Itard, 1774-1838)と弟子のセガン(E. Seguin, 1812-1880)の研究にヒントを得て、感覚訓練のための教具を考案し、発達遅滞の治療に成功を収めた。この成功を実現した方法を一般児にも応用できると確信したモンテッソーリは、「1907年にローマのスラム街に「子どもの家」(Casa dei Bambini)と名づけた施設を開設し、就学前の子どもの教育を行った。ここで用いられた教育方法こそ、「科学的教育学」の方法としての「モンテッソーリ・メソッド(モンテッソーリ教育法)」であった。この教育法の成功により、「子どもの家」には世界の各地から多くの教育関係者が視察に訪れた。これによつて「モンテッソーリ・メソッド」は世界中に紹介され、普及していくのである。

モンテッソーリは、子どもの表す事実を丹念に観察し、子どもの発達は宇宙の法則ともいいくべき自然によって与えられた内的な計画に基づいて行われると考えた。また、発達の各段階、とりわけ幼少期には「敏感期」と呼ばれる期間があり、ある能力を獲得するために、環境のなかの特定の要素に対して、それをとらえる感受性が特別に敏感になる一定期間が存在することを明らかにした。そのため、幼少期の子どもの教育を担う教師(保育者)は、「敏感期」を上手に生かすために「環境の整備」に心を碎くべきことを説いた。

教育における今日的概念のなかには、「縦割り保育」や「異年齢集団による活動」、「チーム・ティーチング」など、モンテッソーリが唱えた革新的見解や理論、進歩的方法を反映したものも少なくない。

2 公教育思想の系譜

1. 公教育思想の先駆者コメニウス

学校は私たちにとって身近な存在である。毎年4月の新学期、新しいランドセルを背負った子どもたちが小学校に入学する。春の風物詩ともいえる光景であるが、こうした光景はいつごろから見られるようになったのだろうか。

子どもが一定の年齢に達すると小学校に入学することが制度として成立したのは、人間社会の歴史においては比較的新しい時代である。それは19世紀の後半、ヨーロッパを中心に近代公教育制度(国民教育制度)が発足したことに由来する。公教育制度は、教育による子どもの健全な成長と社会の安定・秩序を願う思想的見地から提唱されたが、一方で学校教育による国民統治と国家の発展をねらいとする近代国家の為政者たちによって企図された学校制度でもあった。このような近代公教育制度が成立するうえで、「近代教育の父」といわれたコメニウスが果たした役割は大きい。

コメニウス (J. A. Comenius, 1592-1670) はモラヴィア(現在のチェコ共和国の一部)に生まれたが、宗教的迫害や三十年戦争、民族解放運動の渦中で苦難に満ちた人生を歩んだ。そうした彼自身の人生と教育体験を通して、コメニウスは自らの教育思想を『大教授学』(1657)において展開した。「すべての人々に、あらゆる事柄を」教授することの重要性を説きながら、コメニウスは学校制度の改革と体系化を提案したのである。「学校はあるが、それは社会全体のためにあるのではない。……それは金持のためだけに存在しているのである。貧乏人は偶然その機会が与えられるか、他人の同情による以外は学校に入ることはできない」。コメニウスはこのように述べて、当時の学校制度を批判し、すべての子どもたちが貧富の別なく入学・進学できる学校体系を提案した。すなわち、母親学校→母国語学校→ラテン語学校→大学(アカデミア)の階梯化された学校制度がそれである。コメニウスによって提唱された統一学校の構想は、公教育思想の先駆ともいべき考え方であり、今日の学校制度の原型にはかならない。

2. 公教育の計画者コンドルセ

コンドルセ (M. Condorcet, 1743-1794) は數学者としても知られたフランスの政治家、啓蒙思想家である。フランス革命後の1792年、立法議会が設置した公教育委員会の議長として報告書(「公教育の一般的組織に関する報告および法案」)を議会に提出し、公教育の計画を明らかにしている。

コンドルセは、公教育としての国民教育の理念をフランス革命の自由と平等の精神に求めた。その点で、彼の教育計画は政治的権力や宗教的権力などの外的権力からの干渉を極力排除し、公教育の独立性を確保しようとするものであった。また、平等の原則に基づいて、すべての人々に教育を開放しようとする試みでもあった。

報告書において、コンドルセは国民教育を組織することは国家の義務であると主張し、全教育体系として、①小学校、②中学校、③高等中学校(instituts)、④高等学校(lycée)、⑤国立学術院の5階梯の学校制度を提案している。教育計画としての学校の設置に関してコンドルセがとくに力を入れたのは、学校分布の平等性という点であった。小学校は原則として人口400人をもつ村落ごとに、中学校は各地方(district)の中心都市および400人以上の町に、高等中学校は各県に設置すべきであるとした。高等学校は地方の各県に知識人を確保することをねらいとして9校設置し、パリには国立学術院を設置するという計画を立てた。教育課程においては、数学・自然科学・社会科学などを重視するとともに、教育内容から宗教色を排除しようとしたのである。

コンドルセの教育計画は、その後の革命政府の崩壊によって実行に移されることはなかったが、その理念は自由・平等・博愛を謳ったフランス革命の精神の教育的表明であり、その後のフランスにおける教育制度改革の底流となった。そして、19世紀後半の世界各国における近代学校制度の成立と発展に受け継がれていたのである。

3. デューイにおける公教育としての学校教育

デューイ (J. Dewey, 1859-1952) は、アメリカが生んだ知の巨人ともいえる哲

学者、教育学者である。新教育運動の代表的人物でもあり、『学校と社会』(1899、改訂版1915)、『明日の学校教育』(1915)、『民主主義と教育』(1916)、『経験と教育』(1938)などの名著を残した。

デューイが教育界でその名を知られるようになったのは、シカゴ大学附属小学校(「デューイ・スクール」とも呼ばれた実験学校)での実践、実験的取り組みによるところが大きい。附属小学校での3年間の教育実験とその研究結果に基づいて出版された『学校と社会』において、デューイは学校を「小さな共同社会」ととらえ、伝統的な一斉授業中心の学校教育を、作業を中心とする活動的な学習の場に変えることの意義を説いた。また、伝統的な「旧教育は、重力の中心が子どもの外部にある」と指摘し、重力の中心を移動させ、子どもが太陽であり、教育の中心でなければならないと主張した。

デューイはプラグマティズムの立場から、「小さな共同社会」としての学校において、子どもたちは一人ひとりがさまざまな問題解決のための学習活動に取り組むことにより、仮説を吟味しながら問題解決への見通しを立て、結果を検証する過程で相互に協力し、また批評をしながら共同社会に生きる人間として必要な知識と知恵を獲得していくことを期待した。このような学習活動は、共同社会を維持、発展させるためには不可欠であり、子どもたちは「小さな共同社会」での経験を通して、自由で主体的な個人同士が責任を負いながら共同体を支え合う民主主義の本質について理解を深めていくことができる。

デューイにおいて、公教育としての学校教育は、子どもたちが将来参加することになる成人社会において民主主義のシステムとルールを尊重し、問題解決と自己実現の過程を通して、共同体を望ましい方向に発展させていくことを学習するための制度でもあった。すなわち、民主主義のための学校こそがデューイのめざした学校像でもあった。今日、新自由主義をはじめとするさまざまな思想的潮流のなかで公教育の再構築が改めて教育の改革課題となっているが、デューイの公教育についての思想は、この今日的課題に対する有益な示唆を含んでいるといえる。

〔第二版〕

教育の基礎と展開

高野 良清
編著

学文社

豊かな
ながりを
保育・教
育の